

新刊紹介

Rafael Flores Montenegro
AMOR EN TANGO
Gricel-José María Contursi
©2005 Ediciones Deldragón

(文) 石川 浩司

この本はホセ・マリア・コントゥルシ José María Contursi (以下JM) とグリセル Susana Gricel Vigano (以下G) との愛の物語を書いたものである。この話はわが国でもある程度知られているが、二人を取り巻く環境については初出の事実もあるし、写真にも興味深いものがあるので、その一部をここにご紹介することにする。

周知の通りJMは「ミ・ノーチェ・トリスト」 「ラ・クンパルシータ」 など多数のタンゴの名曲に作詞をした詩人パスクアル・コントゥルシ Pascual Contursi (1888~1932) の息子である。パスクアルが成年に達した頃はまだタンゴは搖籃期にあり、本格的な作詞などは行われていなかった。パスクアルの本職は「あやつり人形師」兼「靴の販売人」で夜ともなれば流行のタンゴに適当に詞を付けて歌う暇自慢であったらしい。21歳の時、イルダ・ブリアモ Hilda Briamo という15歳の女性と「出来ちゃった婚」をし誕生したのがJMである。しかしこの結婚は2年で破綻しイルダは幼児を連れてブラジルに行き歌手・女優となる。JMのあだ名 Katunga (子猫) はこの時付けられたらしい。JMは少年期にはブエノスに戻り父親の手で教育を受け、1933年からはラジオ・ステントルのアナウンサーになっている。

しかし、この頃から約30年間のJMを取り巻く環境は激動というに相応しいものだった。



1932年、従妹のアリナ・サラテ Alina Zárate (16歳) と結婚 (のち1男3女を設ける) するが同じ年、父親パスクアルが精神病院で病死する。JMの作詞家としての出発は1933年の「トゥ・ノンブレ」で「ミロンガ・デ・ミス・アモーレス」「ビエハ・アミーガ」と順調に続いたが1938年に体調を崩しネリー・オマールの紹介でコルドバ郊外の保養地カピージャ・デル・モンテのピガノー家に転地療養した。この家の娘がもう一人の主人公Gであった。Gから与えられたインスピレーションを基に書かれたのが「エン・エスタ・タルデ・グリス」「グリセル」「クリスタル」など一連のタンゴである。

程なくJMはブエノスに戻りGとの仲は断ち切られるが、この辺りからJMは逆境が続き1947年には実母もアルコール中毒から精神異常を来し死亡。更に妻アリーナがガンに倒れる。この頃からJMもアルコール依存となり

4人の子供を抱えて経済的にも生活は困難を極めることとなった。

Gとは言えば、彼女は踊りの上手な行商人のホセ・カンバ José Camba という男と結婚しスサーナ Susana という娘を得たがカンバは母子を捨てて戻って来なかった。

1962年になってシリアコ・オルティスがコルドバ郊外を訪れた際、GにJMが独り者になっていることを伝えオルティスの仲立ちでJMはGと共に暮らすことになる。時にJM 51歳、G 42歳だった。(結婚届けは5年後に出されている)

この時点でJMはアルコール依存を抜け出せず仕事らしい仕事は出来なかったが、1967年にSADAICのはからいでメキシコで行われた国際会議に出席し、この時フランシスコ・ロムートとの旧作「ソンプラス・ナダ・マス」(1943年) をポレロ・リズムに改めたものを出版し中南米諸国でヒット、アルゼンチンでもリバイバルしている。

結局JMはコルドバでGおよびGの母親、Gの前夫の娘スサーナとの穏やかな生活を送り10年後の1972年3月11日に亡くなった。Gは1994年6月15日にこの世を去った。



JMとG (後列右)、スサーナ (左)

これらの史実を知って驚いたのはJMの恵まれない境遇、父母から引き継いだのであろうアルコール中毒の恐ろしさであるが、一方そのような健康状態でありながら彼を支えたGの献身にも感動する。写真で見ると少女期のGは健康そのもので、ガソリン・スタンドを営む実家の良い雰囲気も伝わって来るし、実際JMはそこに心を奪われたに違いない。「タンゴの中の愛」という本書の題名はこのあたりをひしひしと伝えてくれる。

新刊紹介

乾 千恵の画文集「7つのピアソラ」

©2006年 岩波書店



誠が震えてきた

ピアソラが亡くなった年にピアソラの音楽を知り、以後コントラバス奏者齊藤徹氏らの手引きでその音楽を10年かけて10枚の絵に仕上げたという。ピアソラ80年代の作品に基づくものが多く、Luna, La Camorra II, III, Buenos Aires Hora Cero などが収録されている。

筆者は1970年生まれの花流書家。1992年ピアソラが亡くなった年にピアソラの音楽を知り、以後コントラバス奏者齊藤徹氏らの手引きでその音楽を10年かけて10枚の絵に仕上げたという。ピアソラ80年代の作品に基づくものが多く、Luna, La Camorra II, III, Buenos Aires Hora Cero などが収録されている。

(石川浩司)